



会報 第54号 令和元年

島根県精神当事者連絡会

作品宛先 699-0552 出雲市斐川町中洲391-2

コーポグリーンライフ12号 畑貴純

連絡先 694-0041 大田市長久町長久453-10

コーポ亀の子II102号 佐貫武之

拘束について思うこと

橘子

義理の母がまた、救急病院に入院していました。血糖値が500を超え、誤嚥でたべものを詰まらせて酸素吸入をしてもらいながら救急車で運ばれました。毎日病院に通って、昼間寝ないように映画音楽の曲を持って行って聞いてもらい、話しかけ、車いすで病院内巡り、などなど、へとへとになっていました。救急に入院してから最初の3日間は用事もあり、疲れていてあまり病室に顔を出しませんでした。4日目に行くと白目をむいておられたのです。昼間は寝てばかり。はっと思うに夜、寝られず、ごそごそあばれて、拘束を受け、余計眠れず、翌日は強い薬で眠らされ、昼間ずーっと白目をむいて眠る状態になってしまっていたのだと思うのです。看護師さんは夜勤、本当に少ない人数で寝られない患者対応が大変なんです。暴れたり叫んだりの患者さんに拘束が一般になっています。夜昼が逆転してしまうのです。昼間の語り掛け、手をかけた看護、家族の訪問は本当に大切です。

お義母さんは認知症も患っておられ、緊急入院した時に、本人の安全のためということで連れの息子が身体拘束を承認する書類にサインをしました。わたしは普段、精神科の退院支援活動などをしていて、複雑な気持ちでした。夜、いきなり拘束を受けたら、ショックでよけい辛い思いをされるだろうと思い、お義母さんに「おかあさんの安全のた

めに手足を縛ることがあるかもしれませんが、できるだけそうならないようにご自分をしっかり持って、コントロールしてください。」と事前にお話をしました。そして「もし、手足を縛られたら、あんたのためにがまんするよ。」とっておられ、本当にわたしは心配でした。身体拘束は精神科病棟だけで起きていることではないようです。救急から他科へ移っても同じです。合併症でいろいろな病気と認知症などを患っている当事者が一般病院でもたくさん身体拘束を受けています。家族も承知の上です。そして、家族のなかには姥捨て山でほとんど顔を出さない家族もおられるようで、「助けて～！ おばば！お願いします！」という叫び声をあげておられるお年寄りもいました。

先週の土曜日、やっと退院できました。家に帰られ、これまた大変ですが、病院にいた時よりは本当に生き生きとお元氣になられ、笑顔もみられます。

私の立場

畑貴純

64歳を迎えたこの頃、私の立場は、サポートする側から、サポートされる側が変わってきたことを実感しています。

当事者連絡会や地域の当事者会でも、自分がやらなければと思うほど、苦しく、助けを求めるようになりました。

世代交代の時期は自覚していたつもりですが、仲間を本当に信じ、自分の役割をバトンタッチすることができなかった自分を情けなく思っています。

今の生活自体も、未だに自分中心的で、素直になれない自分がいます。

サポートされる側に立つのは、誰でもいつかやってきます。幸いなことに、私の周りには、いつでもサポートしてくれる仲間やスタッフがたくさんいます。

こだわりを捨て、身をまかせることが必要だと思っています。

「自分のできることは、やり終えた。」と考え、自然体で生活していきたいと思っています。

これは、弱気とかというものではなく、誰でもやってく

る事です。

それをいつ認めるか、それだけです。私は、ここらへんで、これからは、明るく、健康的な生活を送っていこうと思っています。

本当に疲れました。

第10回しまねこころの交流会 (当事者と家族の交流会)

日時 令和元年11月30日(土)
13:00～15:30

場所 益田駅前ビルEAGA
3F大ホール

テーマ 「夢を語ろう Part 2」

内容 当事者体験発表
グループワーク

第51回島根県精神保健福祉大会

テーマ ひらいてみよう、心の扉

令和元年11月12日(火)

13時から16時まで

石央文化ホール(浜田市)

記念講演「開かれた対話性～多様で豊かな声が心配ごとを減らす鍵」

講師 兵庫県立大学環境人間学部

准教授 竹端 寛 氏